



経営(継業)のツボ

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

因果応報の理

地獄と極楽の食卓を見学したという人を題材とした法話がある。どちらの食卓にも山海の珍味に溢れた数々の料理と三尺箸(1mの長い箸)が並べられていた。

一人として満足な食事を取ることさえままならず、些細なことで喧嘩が絶えなかつたという。

極楽の人は、先を争って食べようとすると一人もいなかった。その箸を使い、向かい合った者同士が「何を食べますか?」と、それ

があり、悪い行いをすれば悪い報いがある」という仏教の因果応報の理を、地獄は利己の心がけ、極楽は利他の心がけに譬えて論じた逸話である。

主宰塾では、「地獄と極楽の箸の話を知っている人はいますか?」と、折に触れて尋ねてきた。「知っている」と答えた3割近くの塾生は、祖父母や両親、利用者から聞かされたことがあると口にした。「三尺箸の教え」から学ぶことは少ない。

順逆一視

江戸時代後期に活躍した山田方谷、佐久間象山、横井小楠など多くの英才に影響を与えた佐藤一斎は、江戸幕府直轄の最高教育機関である昌平坂学問所の儒官(総長)を務めた人である。一斎が40年

余にわたって書き記した『言志四録』は、西郷隆盛の愛読書としても語り継がれている。その一つ『言

志晩録』のなかに「人の一生には、順境有り。逆境有り。消長の数、怪む可き者無し。余又自ら検するに、順中の逆有り、逆中の順有り。宜しく其の逆に処して、敢て易心を生ぜず、其の順に居りて、敢て

惰心を作さざるべし。惟だ一の敬の字、以て順逆を貫けば可なり(第184条)」とある。

その意は、「人生には、順境もあれば逆境もある。これは栄枯盛衰の自然の法則で、少しも不思議ではない。だが、順境・逆境といつても、順境のなかにも逆境があり、逆境のなかにも順境がある。だから、逆境にあつても不満や自暴自棄の気持ちを起こさず、順境にあつても慢心や怠け心を起こしてはいけない。ただ、敬の一時をもつて終始一貫すればよい」*1

『菜根譚』*2には、順逆一視(順境も逆境も同じようにみなすこと。一喜一憂しないこと。後集120条)とある。

毎日の生活に振り回されてしまうと、そこから不満の芽が吹き出してくるのが人の常。

「禍福は糾える縄の如し」

「人間万事塞翁が馬」

こうしたことわざもある。明言を諳んじるだけでなく、そこから何を学び得るのか。時代の変化を見据えつつ、「今、改めて何を学び直すべきか!」ということの一助としたい。

人間力が問われている。

転期に立つ経営の視座 ④
三尺箸の教え

地獄の人は、先を争って食べようとするとそのもの、三尺箸が災いして食べ物を口に運ぶことができずにイライラしていた。その長い箸を器用に使う者もいたが、その姿を妬む者は、箸を使って突く、叩くなどの邪魔を繰り返していた。こうした光景は毎食のことで、誰

それが声をかけ合いながら食べさせ合っていた。

「自分さえよければ、他人はどうでもよい」と考える利己的な地獄の人と、「自分のことはさておいて、他人のためにはどうしたらよいか」と考える、利他的な極楽の人。「人はよい行いをすればよい報い

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。『介護ビジョン』編集委員。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

<http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

*1: その意は、『現代語抄言志四録』(PHP研究所、2005年、P168-169)から引用する随筆集

*2: 中国明代末期に洪自誠が記した前集222条、後集135条から